

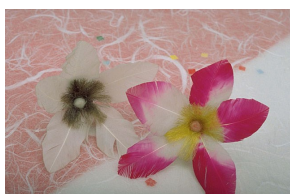
『年頭挨拶』

代表理事会長 時崎栄

新年明けましておめでとうございます。本年も昨年同様よろしくお願い申し上げます。年末年始には、たくさんの患者が来院し、勤務なされた職員の皆様には、本当にご苦労様でした。心よりお礼と感謝申し上げます。昨年は記録的な豪雨による土砂災害や御嶽山の噴火など、数多くの天災が日本列島を襲いました。もはや郊外・都市部関係なく毎年のように起きてしまうことで、いつしか慣れて危機感を覚えなくなるのではと危惧をしております。しかし私どもも医療機関で働く人間として、いかなる事態になろうとも地域住民の健康を守る体制を維持できる様に、「災害への準備」と「心の引き締め」を怠らないように、日々精進していければと思います。

さて、近年は当院のみならず医療機関を取り巻く環境には非常に厳しいものがあります。消費税増税や診療報酬改定で△1.26%という逆風が吹いている中、地域の皆様に何が出来るか考えなければなりません。政権も長期安定の様相をようやく見せ始めておりますので、様々な不安要素はありますが、これから先も長く地域の信頼に応え続けるために、職員一丸となることを新たに決意するものであります。また社会保障制度を将来にわたり維持するとして、昨年4月に「医療機関の機能分化・強化と連携」が課題となり、病床報告制度をもとに各県で地域ごとの医療の将来像を描き出します。高齢化で膨張する医療・介護費を抑制し徹底効率化する中で、特に患者の大病院への集中を是正する対策として、紹介状を持たずに受診した患者に全国一律の定額支払いを求めるなど、医療の根幹に係わる問題が山積しており、これから当院の立ち位置をしっかりと見極めていく必要があります。

なお今年は新築から13年目になるため、院内の体制や環境・設備などを見直して、職員満足度の向上、環境の充実と先進医療技術の提供を推し進めてまいります。そしてこれからも保健・医療・介護を通じ、地域住民の健康を守り、地域にとって信頼される厚生事業、豊かな地域社会の繁栄に努めて参る所存でありますので、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



『新年挨拶』

院長 奥澤星二郎

明けましておめでとうございます。お陰様で当院は昨年も多くの患者様のお世話をさせていただきました。昨年1年間の実績を申し上げますと、外来患者数26万5千人(佐野市人口の2.1倍)、入院患者数16万5千人、このうち救急外来を受診された方々は1万4千人に達し、他の医療機関からの紹介患者様も8,700人と前年に比べて急増しました。中央手術室における大きな手術件数も3,000件近くとなりました。また、市内で唯一の2次救急輪番病院として、3,100人の病状の重い救急搬送患者様を収容いたしました。これは、市内で救急車にお乗りになった急病者3人のうち、2人を当院がお受けしたことになります。これらの件数はいずれも市中病院の中で群を抜いて最多であります。

当院では「安全・安心で良質な医療」をモットーに、多方面から改革が進行中です。例えば、日々、多くの患者様をお世話している当院にとって、すべての急病者がすぐに入院可能な病床の確保、外来待ち時間短縮、接遇向上など、とくに改善すべき様々な課題があります。外来部門では患者様の医療費軽減を目的に、薬価の低い後発医薬品への切り替えが進んでいます。混雑する診療科の待ち時間は未だ改善困難ですが、待ち時間を活用いただけるように、昨年2月から2回、外来ロビーにて患者様を対象に専門職員が大切な医療情報を提供する「さあ～寄って講座」を開始しました。ビデオ編集した講座内容は外来の8台のテレビモニターから連日放映し、ご好評をいただいております。2階外来ブースにおける飲み物のワゴン販売も開始しました。入院部門においても診療の標準化や病床一括管理システムなどが整いつつあります。地域住民の方々のための理想の病院作りを目指し、引き続き、職員一丸となって改革を進めてまいります。

新年を迎え、みなさまのお体の具合はいかがでしょう。本年がみなさまにとりまして健やかな一年でありますように、職員一同、心よりお祈り申し上げます。

『瞼(まぶた)のけいれんについて』

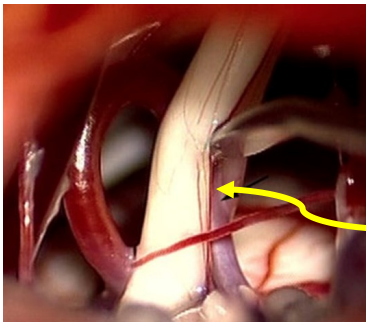
脳神経外科部長 永井 睦

「まぶた」がけいれんすること、だれでも経験ありますよね。「まぶた」のけいれんが症状となる病気は色々ありますがここでは片側顔面けいれんの話をしようと思います。似たような症状で最も多いのが顔面ミオキミアです。これは誰でも経験がある「まぶたがピクピクする」というやつで、虫がこのような運動がまぶたにだけ起きるもので、単にストレスや睡眠不足や疲労によるもので病気と捉える必要はありません(ただしこの症状が顔面全体に広がってゆく場合は脳腫瘍や変性疾患が原因となっている場合があります)。

片側顔面けいれんは典型的には、一側の眼輪筋から始まり下方に波及してほぼや口角、下あごにけいれんが及んでゆきます。また疲労やストレス、不安、緊張、寒冷暴露などで増強されることが多く睡眠中にも出ます。自然に治ることはほぼありません。原因は頭蓋内で脳幹から出た顔面神経への脳内血管の圧迫と考えられています。

治療は抗てんかん剤を使った薬物治療とボツリヌス毒素をけいれん局所に注射する方法と手術があります。手術では圧迫血管を神経から外すことをします。「微小血管減圧術」と言います。原因を取り除くことができるので手術がうまくゆけばそれ以降この病気に悩まされることなく治癒することが可能です。

この病気は放置しておいても命取りになるものではありません。顔面がひきつることで本人にとっては違和感が生じ他人からは見た目が悪くなったりしますので、この苦痛の程度によって治療の必要度が変わります。実際、治療オプションを提示しても放置している人も大勢います。学校の先生など大勢の目の前で話をする仕事についている人は治癒を目指し手術を希望する方が多いようです。



顔面神経が血管によって圧迫されて屈曲している
(矢印が圧迫している血管、手術用顕微鏡所見)



『地域包括ケアと訪問看護』

訪問看護ステーション「かたくり」

急速な高齢化が進み、団塊の世代が75歳になる2025年に、後期高齢者が全人口の2割近くになると推定されています。

国際医療福祉大学の高橋 泰先生は「今までの『とことん』型医療に対し、75歳以上が必要とする医療は、病気は完全に治らなくても、地域で生活を続けられるよう身体も環境も整えてくれるような『生活支援型医療』『まあまあ』型医療であり、年齢が進むほどこの傾向は強まる。そのため、リハビリや継続的治療の提供を行うこと、地域での看取り医療も重要な役割になってくる。」と話されています。すでに在宅医療の現場では、生活支援型医療が普及し始めています。医療施設が急激に機能分化していく中、医療を受ける方々が制度の仕組みを理解し、尊厳を持った最期を選択できるような手助けが必要だと思えます。その役割を担うのが、訪問看護ステーションではないかと考えます。

とある家では今年のお正月に、妹夫婦も交えて、74歳になる母のこれから…を話題にしました。母は、「病気になったら特別な治療や延命はせずに自然に逝きたい。」とのこと。多少足腰が弱ってきましたが、まだ元気だからこそ話し合えたことでした。日頃から、本人の希望を聞くことと、家族がそれを理解し、支えることが基盤となります。

2025年を目途に、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、「住まい・医療・介護・予防・生活支援」が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築が急がれています。訪問看護ステーションは、その地域包括ケアシステムの中で中心的な役割を果たすことが期待されています。

訪問看護ステーションかたくりは、小規模なステーションではありますが、「その人らしさを大切に」「どんな生き方をしたいのか」のお手伝いをしていきたいと思えます。

広報委員

- ・奥澤星二郎(医師)
- ・安部正彦(事務)
- ・高橋忠幸(事務)
- ・河邊正浩(事務)
- ・山脇富士野(看護)
- ・羽角安夫(事務)

編集後記
あけましておめでと
うございます。
厳しい冷え込みや大雪で、北国の方は大変な日々を過ごされているようですが、この地域は、雪も災害も少なく、とても過ごしやすい地域と感謝しております。年末の選挙結果から官邸指導で経済優先が問われ、社会保障関係には厳しい改革が迫っており、医療と介護の連携を強め地域で支える政策へと変化をしております。今後は佐野地区全域で急性期から慢性期そして介護を適切に循環できる体制が必要と思われまます。
また、インフルエンザの集団感染が報道されています。マスクの準備をお忘れなく。 ㊦